

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり 時事新報には毒魏譯細なる商況物價の報吉あり

時事新報

明治廿七年八月八日 水曜日
舊曆甲午七月八日 (壬午)
山出前夜九時三十分
月入午後九時三十分
西曆一千八百九十四年
（西曆一千八百九十四年）
二百二十日
百四十五日

表誠義金募集

清國に對する宣戰の開始は下りたり陸上に海面に兩國の戦艦は開かれたり牙山清兵の本據を抜き清國を豊饒の大海に捕獲して我軍向ふ所敵なしと雖も敵は世界無比の大國なり我國民の全力を盡して全局の必勝を今後に期せざるを得ず我海陸軍の忠勇なる敵軍を攻撃する素より遺算なしと雖も家に在る全國の臣民は坐して我將卒の忠勇に依頼し以て安んずべきに非ず成敗の一段我將卒五名を失ひ下士卒傷傷凡七十名、骨を萬里の異域に曝すは我が忠勇なる將卒の期する所なりと雖も帝國の臣民内に在りて此報に接するもの無限の威なき能はざるべし且夫れ東洋先進の我文明を以て朝鮮の獨立を確實にし固陋の清國を兼味の域に救出し我亞細亞の諸國をして文明の曙光に照らしむるもの我國全體に伴ふの結果なり我が帝國が今回の交戦に對する責任重且つ大なりと云ふべし正々堂々たる我陸海軍の軍隊戦艦は百艘の雄姿より欠くる所なく全局の必勝期すべしと雖も事は今古未曾有の外戦なり帝國の光榮利益盡して此一舉にあり之を思へば帝國忠實の臣民は其赤誠の凝結する所今日黙して止む能はざるべし左れば國を思ふの赤誠を表せんを欲して其道を得ざるもの四千萬の同胞皆然らん本社は世人熱情の在る所を察し其赤誠を表するの義金を集め之を當局者に委託して必勝を期すに期するの責に供せんす家に在るの臣民斯の如きを聞かば外に在るの將卒を慰するに於て多少の裨益なくんばならず亦我が國民忠愛の至情を中外に表白して國威を宇内に發揚するの道たるべし義金募集の規定三項を設けて左に掲ぐ

- (一) 義金は十元以上とし住所番地姓名を詳記して本社に送附せらるべし
- (二) 本社に於て義金を受取りたる時は翌日の時事新報に其氏名金額を掲げて之が報にす故に翌日の新報に此報集金ものほ更に照會せられ度し
- (三) 此義金は募集の上、當局者で熟慮し最も適當の費途に充つるものとす

明治廿七年八月 時事新報社

時軍新報

日本人の天職

文藝の昔、豐太閤の略を朝鮮に借て明國を征せんとするや或以漢文を善くする者を伴ふ可しとの説を提出したるに豐公は一笑して此行、彼の四百餘州をして我文を用ひしむ可きの何れ漢文を善くするもの伴ふの必要ありんやと之を排斥したりと云ふ蓋し豐公の我文を用ひしむ可し云々とは四百餘州を征服し我が言語風俗を彼に輸入して其人民を化して純然たる日本人たらしめんとするの意味なる可し今國體の改革は蓋々たる文明の國にして其國土を併呑し其人民を服従せしむるが如き事期する所に非ず世界文明の風潮を四

百餘州の全土に及ばし彼の四億の人民をして文明の徳澤に浴せしめんとするものなれば豐公が彼の人民を日本化せしめんとするに比すれば名正しく事順にして其任する所、其大なりと云ふ可し而して豐公の時代に在りては我兵素より勇武なりと雖も兵器軍略の點に於ては彼我相對して格別の相違を見ず双方共に刀劍弓槍の類を用ひ夜討朝襲の一騎打にて相戦ひたるものとされども今の日本の軍隊は全く文明流の組織にして文明の兵器を利用する其反對に彼には假令其兵器あるも之を利用するの法を知らずして其不紀律無勢力、當時の明軍に比して一步を進めざるは近來の事實に徴するも明白にして三百年前の舊軍を以て文明日新の精銳兵に對す其勝敗利鈍は讀者を待たずして知る可きのみ我が開戦の趣旨は公明正大、世界に公言して毫も憚る所なき其上に日本人の忠勇武烈、訓練の熟練、兵器の精銳向ふ所、前なくして遂に最後の目的を達するは我輩の確信して疑はざる所なり

抑も文明日新の風潮は殆んど全世界を覆倒して我日本の如き既に四十年前より其風潮を蒙りて國內の一切の組織を變化し改進黨歩の途に上りたるに彼の支那帝國は日新の風潮中に立ちながら今日に至るまで毫も面目を改めず蓋し内に自から進歩の素養あるものは一た以外の風潮に接するときは之に移るも其甚だ容易にして即ち我國が米國人に開國を促されて忽ち改進黨歩を取り着々進歩の實を呈したるは其素質の然らしめたる所なれども彼の支那人に至りては西洋の文明國と交通を始しめたるは我國よりも古きのみならず阿片の騒動に付き廣東の砲臺と云ひ英佛聯合の北京侵略と云ひ又前年福州の失敗と云ひ文明の勢力に敵對して屢ば懲らしめられたるにも拘はらず尚ほ頑として動かざるを見れば彼等の腦筋は殆んど化石も同様にして尋常一様の手段にては刺戟を感ぜしむるも到底醒さざる可し彼の國人が頑固自から悟らざるは只自國の弊を長く今日の大勢はますます急激にして彼の古帝國の體を長く改革の端を開くは必至の勢なりとして彼の手に任するものは何れの國人なりやと云ふに目下西洋諸國の形勢は恰も軍事的平和とも云ふ可き有様にして各國共に非常の兵力を養ひ非常の國力を費し互に相闘して他の國を窺ふ其間に僅に一日の平和を偷むの姿なるが故に東洋との關係の如きも成る可く平和を旨として無事を謀り彼の英佛の兩國人が同盟して北京を陥れ支那人の頑抗を懲らしたるが如き壯事は容易に望む可きに非ず即ち支那の古帝國が今の文明世界に立ちながら尙ほ其強權を保ち固陋自から安んずるものとを得る所以なれども文明開化は今日既に西洋諸國の特有に非ず四十年來幾多の辛苦を嘗み幾多の實験を經て東洋自から文明の強國を現出し其餘光比隣の東洋諸國を照らし長く其強國に安んずるを許さず今日本が朝鮮に備

義上の忠告を與へ其國事の改革を促すに當りて支那人が種々の反對を試み文明の事を妨げんとしたるを彼等の最後なれ蓋し彼等以自から力を盡らして一時の田來心より斯る所行を働きたるもならん然れども世界の形勢より觀察するときは今度の事たるや偶然にも日本人の手を假り文明日新の新鮮氣を彼の四百餘州に及ばしむるの好機會を與へたるものにして日本人は恰も支那人を懲らしめて幾千年來の蒙昧を啓くの天職を授けられ正に天命に從て運動するものなれば他に憚る所なくして飽までも其職分を盡すの覺悟肝要なる可し或は今回日本人の力を以て一大打撃を與ふるときは彼の人民は始めて目を覺まして文明日新の光を拜するも同時に四百餘州の版圖は四分五裂して支那古帝國滅亡の端を開くに至るやも知る可らずと雖も其説は始く後に譲り苟も日本人たるものは其天職の重大なることを心に體し飽までも勇往敢取して東洋文明の先進者たる實を盡し世界に對して大名譽の地位を占むるは勿論、日本國中に於ても今日以後は豐太閤の偉業を説くものなきに至らしめんと我輩の敢て希望する所なり

官報

告示

○海軍省告示第十號
從世保軍港及對州竹敷港位位口ニ出入スル普通船船心傳左ノ規定ニ
明治二十七年八月七日 海軍大臣 伯耆西園從進
從世保軍港及對州竹敷港位位口ニ出入スル普通船船心傳
第一條 從世保軍港及對州竹敷港位位口ニ出入スル普通船船心傳
第二條 從世保軍港及對州竹敷港位位口ニ出入スル普通船船心傳
第三條 從世保軍港及對州竹敷港位位口ニ出入スル普通船船心傳
第四條 從世保軍港及對州竹敷港位位口ニ出入スル普通船船心傳
第五條 從世保軍港及對州竹敷港位位口ニ出入スル普通船船心傳

關門彙報

八月二日午後馬關に於て 山崎知遠
肥後丸の歸航 客月二十八日京城、仁川の我居留民三百餘名を乗せ歸航の途に就きたる肥後丸は豫報の如く釜山及び長崎に寄港し本日午前七時過ぎ當港に到着せり今同船の廣らす所に依り朝鮮の近況一斑を窺せんと
陸軍の大勝利 本營を龍山に構へて京城附近の要地に屯營せし我陸軍は朝鮮國王の勅托を受け牙山の清兵を退去せしむるため去月二十五日を以て征途に上れり依て世人は一般に二十九、三十兩日の比に於て必ず日清兵の間に衝突起り懼れ牙山の近傍は忽ち腥風血雨の慘狀を現出するならんと想像し皆首を延べて其結果如何を待居りしに果せる哉肥後丸は釜山碇泊中に二十九日夜日清の陸兵接戦し清軍死傷甚しく我軍大勝利との報に接したりと云へり然れども其の何の地に於

關門

陸軍の大勝利 兵 水原を南に 海門、南陽に 二十五日を以て 三十兩日の頃 傍忽ち劍光閃 世人の一般に 龍山に於て 牙山の近傍に 依り我兵は其 交戦に及びた 一以南陽より 水原の進路を取 眞松の險山に 依り我兵は其 交戦に及びた 一以南陽より 水原の進路を取 眞松の險山に 依り我兵は其 交戦に及びた